どうも、こんばんは。阿部です。

このあいだは人見知りであんまりお話できなくてすみません；がんばります。。。

脚本の方ですが、きららちゃんの「狐が騙す」というイメージや、つたがわくんが言っていた久石譲の音楽を頼りに再度資料を探していたところ、高橋順子さんの「うたはめぐる」という本に出会いました。

その中に「霞　朧夜の幻」という章があるのですが、そこには

**「公達（きんだち）に狐化けたり宵の春」**という与謝蕪村の句が挙げられています。

**「春の宵はものの形も音も、ぼうっとかすんで、やわらかく呼吸しているようだ。湿気の多い風土の一特徴だが明るくも暗くもない、えもいわれぬ光が充満している中から、何が動き出すか。」（高橋順子、P12引用）**

狐、というイメージが醸し出す妖しくも幻想的な雰囲気、とても良いと思うんですが、

与謝蕪村の句からは、古森の中朧灯りのもと妖（あやかし）たちの宴が開かれ、妖狐が舞い踊る雰囲気を連想しました。（以下箇条書きにします）

* 場所は古森の中の御社。そこに二対の駒狐（狛犬の狐バージョンですね、鎌倉の神社とかでよく見かけます）の石像が建つ。スクリーンで石の駒狐のシルエットが映し出される。ダンサーはそのシルエットの中に隠れてる感じ。徐々に雲間から月の光が差し込み、明るくなり始め――シルエットが溶けだし、呪縛が解かれ、駒狐が動き出す――
* 男女の妖狐が舞い踊る月影の中の宴。
* そこに、一人の人間が迷い込んでしまい、妖狐たちはその少女を莫迦そうとするものの、少女に逃げられてしまう。

　　男の妖狐は人間の世界に興味を持ち、人間の姿に化け少女の影を追い街に出ます。

* しかし雑踏の中に彼女の影を見失ってしまい、人間に化けた狐は大都会のなかに独り放りだされる。(森の中とは一転、音や光の洪水に呑まれていく感じでしょうか。。。めまぐるしい雑踏や高層ビルなどの都会的なイメージ、映像的に表現できたらカッコイイんじゃないかなと思います。)
* 始めは興味津津だったけれど、段々「もうやだこんなうるさいとこ！」みたいに狐は蹲ってしまう。折しも雨が降り始め（きららちゃんのノートにあった「雨」っていうのどうしても入れたかったので）途方に暮れていると、一人の少女が狐に化けた男に傘を差し出す。

（シンドラーのリストとかでも使われた手法ですが、周囲の雑踏はモノクロで、少女の差し出す傘だけがポイントカラーで赤、っていうのも素敵かな、なんて思いました。）

* それから少女が人間に化けた狐の手を引き、人間の世界を見せてくれる、みたいなストーリーはどうかな。。。と思うのですが。少女の見せてくれる世界は純真さと希望に満ちていて、人間界ってわるくないじゃないか、おれもこんな場所で生きていけたら・・・なんて思い始める男狐。

最終的にやりたいなと思うのは、「姿は人間、だけどスクリーンに映る男の影は狐の姿」っていうものなんですが、技術的には可能でしょうか？（映像担当の、のむさん。。。）

そこで少女は彼が人間ではない、ということに気付くというシーンはどうでしょう。

* 少女に惹かれていく男狐ですが、女狐に住む世界の違いを諭され（女狐は男狐が少女に惹かれていくのが気が気でない。そんな二匹のすれ違いというか葛藤みたいな姿をデュオで表現できたらいいな）、男狐は後ろ髪を引かれる思いで古森の社へ帰っていく。

オチはまだ考え中です。（そもそもこの案が通るかどうかですが。。。）

上橋菜穂子さんの狐笛のなんとか…って小説のラストからイメージをお借りすると、やっぱり狐は森へ帰ってしまい、だけどときどき、少女は街の中で赤い傘を差す人を見かけるとふと彼を思い出してしまう。。。みたいな感じかなぁ　と思っています。

私はダンスについてはど素人なので、ダンスってどういう風に作っていくかについては全く知識がありません。演出プランについてはダンサーの方、アイディア絶賛募集中です。

今回は以上です。宜しくお願いします。